

### 加古川五ヶ井用水と新井用水～今里伝兵衛の新井用水開削～

#### ○加古川五ヶ井用水と加古川大堰

加古川市八幡町中西条から上荘町都染にかけての加古川本流を堰き止めて作られた旧五ヶ井堰(写真左上)は、聖徳太子創設と伝えられています。本流を堰き止めて得た水は、支流の草谷川河口を堰き止めた平松井堰(樋門)に一旦落ち、加古川の左岸(東側)の用水路(溝)を通り、北条郷・加古庄・岸南庄・長田庄・今福庄の5か郷(庄)の村々に流れていきます。五ヶ井郷と呼ばれる村は江戸時代20か村で1万1,900石ほどの田地を灌漑していました。後にできる新井郷と余水を利用する垂井郷の約8,000石を合わせると、約50か村、約2万石を灌漑していました。

平成元年(1989)3月に、国土交通省(当時は建設省)が、この五ヶ井堰と下流の上部井堰(加古川の右岸・西側を潤す)を統合し加古川大堰(写真上中・右上)を完成させ、五ヶ井堰は取り壊され、以降加古川大堰から取水しています。(※加古川大堰は農業用水のほか、工業用水、水道用水を供給する利水の役割と治水の役割も担っています。また、上流の広い水面を使ってのレガッタの日本漕艇協会B級公認コースができ、加古川レガッタや全国大会が催されています。)

#### ○今里伝兵衛と新井用水

承応3年(1654)、西日本一帯が大干ばつに襲われ、用水をため池と野井戸にたよっていた古宮組大庄屋今里伝兵衛は、領主姫路藩主榊原忠次に水路の開削を願い出ました。工事は、明暦元年(1655)正月からはじまり、藩内から延べ16万4千人が集められ、翌年3月に完成しました。

水路は、五ヶ井の平松井堰から古宮大池(播磨町大池)まで延長約13kmで、坂元、長砂、坂井、二俣、一色、別府、西脇、野添、中野、西本庄、東本庄、古宮など24か村約600haの田を潤しました。この用水は、五ヶ井用水を利用し、新しく開発したため新井用水と名づけられました。

日岡山山麓の固い岩盤削り、曇川・白ヶ池川・喜瀬川の底に通す埋樋(うづみび:サイフォン技術使用、昔は松材、現在はコンクリート)、傾斜がほとんどない地形を蛇行しながら巧みに流す工夫など、難工事を乗り越えました。

五ヶ井用水から6分の1の配分を受けた水(左上写真の左水路)は日岡神社西を通り、加古川市立中部中学校西の峠池などに補水、団地や住宅の間を通り、途中の田地を潤し、最後古宮大池に注ぎ込みます。古宮薬師堂に伝兵衛の墓があります。

【参考資料】『五ヶ井土地改良区誌』(1987)、『加古川総合文化センター博物館常設展示あんない』(1992)、『播磨町文化遺産散策マップ』(2015)、『ふるさとの川紀行』(2009)等

